

高等学校通信制課程におけるキャリア教育の効果の測定の試み —進路未決定の問題への応答—

An Attempt to Measure the Effect of Career Education in the High School Correspondence Course:

Responding to issues where the course has not been decided at the time of graduation

桐村 豪文*・山本 了輔**・多々良友美**

Takafumi KIRIMURA*・Ryosuke YAMAMOTO**・Tomomi TATARA**

要 旨

本研究では、学校法人益田永島学園・明誠高等学校による文部科学省委託事業のもと、通信制課程卒業生の進路未決定の問題を前に、通信制課程の高校生を対象にJSTを行った結果として、社会参加意識をはじめとする彼らの内面における心的傾向の変化を捉え、もってJSTの効果測定するため、アンケート調査を行い、その結果の分析を行った。

分析の結果、「社会的消極志向」という因子が出力され、さらに因子の全体を捉えた上で、プロット図上で課題となる象限の存在を発見するに至った。その上で、彼らの内面における心的傾向の変化をプロット図上で可視化した。

キーワード：通信制課程、キャリア教育、JST、進路未決定

はじめに

本研究は、高等学校通信制課程が抱える課題に対して実践的に取り組むものである。その課題とは、卒業生の進路決定率の低さである。学校基本調査の卒業後の状況調査によれば、「進学も就職もしていない」割合が、平成29年度では、全日制・定時制課程は4.7%であるのに対し、通信制課程は37.1%であり、進路未決定の高さが実態としてここに表れている。なお10年前（平成19年度）もその値が40.2%であることから、これまで手付かずの状態にあったことが伺える¹⁾。

本研究は、学校法人益田永島学園・明誠高等学校が文部科学省の委託事業「高等学校における次世代の学習ニーズを踏まえた指導の充実事業」（平成30年度）の採択を受け、「通信制課程卒業生の社会参加意識の向上にむけたキャリア教育指導法確立プロジェクト～能動的な選択による進路実現にむけて～」という事

業名で取り組んだものである。本事業では、特定非営利活動法人志塾フリースクールが同校と連携し、同校在籍の生徒をはじめ、益田市内外の不登校児童生徒に対して学習支援をはじめとする様々な支援を行っている。

本事業で重視したのが、先述の通信制課程卒業生の進路未決定の問題である。この問題を前に本事業では、通信制課程卒業生の社会参加意識の向上を目的に、通信制課程のカリキュラムの中でキャリア教育の充実を図った。具体的には、社会意識の向上を目的とした職場対人技能トレーニング（Job related Skills Training, JST）を企画・実施し、専門家の指導を受けながら、効果的な指導方法の確立を目指した。

なお、本事業では、実施したキャリア教育の指導方法の効果測定するため、ガイダンス後とJST実施後にアンケート調査を実施した。本稿は、その調査結果の分析を行ったものである。

* 弘前大学教育学部学校教育講座
Department of School Education, Faculty of Education, Hirosaki University
** 特定非営利活動法人 志塾フリースクール
Nonprofit organization Shijuku Free School

分析の目的は次の二つである。一つは、効果的なキャリア教育の指導方法の確立に向けて、実施したキャリア教育の指導方法の効果を測定し、今後の改善の検討材料に用いること、である。そしてもう一つが、通信制課程卒業生の進路決定率の改善を目的に、それを規定する要因を探り、その改善に効果的なキャリア教育の指導方法を探る上で必要となる視座を得ることである。本稿では、事業対象者が調査時点で高校1・2年生であったことから、主に一つ目の目的に関して扱う。事業として今後は、二つ目の課題についても扱う予定である。

1. 調査の概要

本事業を実施したのは、明誠高等学校通信制課程の本校（島根県益田市）とサポート校の久留米 SHIP、松江 SHIP、福山 SHIP、鳥取 SHIP の5か所である²⁾。

各所における実施期間、実施回数、実施した人数、また事業対象者（高校生）の内訳は表1・2のとおりである。

表1 事業の実施概要

実施場所	実施期間	実施回数	人数
益田	平成30年8月 ～平成31年2月	4回	11名
久留米	平成30年11月 ～平成31年2月	2回	30名
松江	平成30年12月 ～平成30年12月	2回	5名
福山	平成30年11月 ～平成30年12月	2回	11名
鳥取	平成31年1月 ～平成31年1月	2回	26名

表2 事業対象者の概要

実施場所	性別		学年	
	男	女	1年生	2年生
益田	4名	7名	4名	7名
久留米	18名	12名	16名	14名
松江	3名	2名	1名	4名
福山	6名	5名	5名	6名
鳥取	15名	11名	10名	16名
合計	46名	37名	36名	47名

実施場所によって実施回数が異なり、益田の本校では8月にガイダンスを行い、ガイダンス後にアンケート調査を実施、その後、9月、12月、2月にJSTとJST後にアンケート調査を実施した。他教室では、福

山は11月にガイダンスとアンケート調査、12月にJSTとアンケート調査を実施、久留米は11月にガイダンスとアンケート調査、2月にJSTとアンケート調査を実施、松江は12月にガイダンスとアンケート調査、同月にJSTとアンケート調査を実施、島根は12月にガイダンスとアンケート調査、1月にJSTとアンケート調査を実施した。

1回目のJSTでは「職場対人技能トレーニング～あいさつの意味～」というタイトルでキャリア教育を実施、2回目のJSTでは「ストレス回避とリラクゼーション技能トレーニング～ストレスと上手につきあう～」というタイトルでキャリア教育を実施、3回目のJSTでは「マニュアル作成技能トレーニング～マニュアル作成への第一歩～」というタイトルでキャリア教育を実施した³⁾。

表3 アンケート調査の質問項目

(1)自分なりの個性を大切にしている
(2)自分の夢をかなえようと意欲に燃えている
(3)自分のはのびのびと生きていると感じる
(4)自分はひとりぼっちだと感じる
(5)みんなと意見が違っても、自分の意見を言うことができる
(6)無理に人に合わせようとして、きゅうくつな思いをしている
(7)思いやりをもって他者とかわかることは大事だと思う
(8)自分のやるべきことは責任をもってやり遂げる
(9)過去の失敗をくよくよ後悔しない
(10)難しいことでも、やる気を出せば、できると思う
(11)友達とけんかをしても、うまく仲直りができると思う
(12)時間を無駄にしたくない
(13)保護者からの自分への期待が高いと感じる
(14)休みがたくさんもらえることは大事だと思う
(15)自分ができる仕事は世の中にたくさんあると思う
(16)自分の未来は明るいと思う
(17)お金をかせぐことは大事だと思う
(18)何でも最後は自分で決めたいと思う
(19)今日取り組んだ学習は、自分の将来に役立つと思う

アンケート調査では、進路決定に課題をもつ通信制課程の固有性を踏まえた上で、そこで効果のあるキャリア教育の指導方法の確立を目指し、JSTを受けた高校生たちの内面の変化を捉えることを目的とした。つまり、JSTを繰り返す中で、彼らの内面における社会参加意識等の心的傾向にどのような変化が行っているか、またどのような課題を有する生徒がまだ存在するかを可視化することを目的としているのである。アンケート調査の質問項目は、表3のとおりである。それぞれ「あてはまる」「どちらかと言えばあてはまる」「どちらでもない」「どちらかといえばあてはまらない」「あてはまらない」の5段階で回答してもらった。

2. 分析の結果

2.1. 質問項目別の集計結果

表4は、初回に実施したアンケート調査の回答結果を集計したものである。有効回答者は83名である。この結果から、JSTを受ける前の彼らの内面の特徴を、質問項目ごとに考察する。

(1)自分なりの個性を大切にしている

「どちらでもない」の回答が約3分の1を占めているが、自分の個性に対する評価についてはポジティブな回答の割合が比較的高い。しかし後述するように、質問「みんなと意見が違って、自分の意見を言うことができる」では、他者との間に摩擦が起こるほどの個性の表出については、後ろ向きの姿勢が伺える。

表4 質問項目別の集計結果 ※上が実数(名)、下が各質問項目の回答総数に占める割合(%)

	あてはまる	どちらかといえばあてはまる	どちらでもない	どちらかといえばあてはまらない	あてはまらない
(1)自分なりの個性を大切にしている	15 18.1	30 36.1	26 31.3	11 13.3	1 1.2
(2)自分の夢をかなえようと意欲に燃えている	13 15.7	13 15.7	24 28.9	25 30.1	8 9.6
(3)自分はのびのびと生きていると感じる	19 22.9	28 33.7	23 27.7	9 10.8	4 4.8
(4)自分はひとりぼっちだと感じる	6 7.2	17 20.5	30 36.1	19 22.9	11 13.3
(5)みんなと意見が違って、自分の意見を言うことができる	14 16.9	16 19.3	24 28.9	17 20.5	12 14.5
(6)無理に人に合わせようとして、きゅうくつな思いをしている	6 7.2	17 20.5	24 28.9	18 21.7	18 21.7
(7)思いやりをもって他者とかわることは大事だと思う	34 41.0	31 37.3	15 18.1	0 0.0	3 3.6
(8)自分のやるべきことは責任をもってやり遂げる	19 22.9	34 41.0	24 28.9	6 7.2	0 0.0
(9)過去の失敗をくよくよ後悔しない	11 13.3	13 15.7	19 22.9	28 33.7	12 14.5
(10)難しいことでも、やる気を出せば、できると思う	12 14.5	27 32.5	27 32.5	13 15.7	4 4.8
(11)友達とけんかをして、うまく仲直りができると思う	12 14.5	26 31.3	26 31.3	18 21.7	1 1.2
(12)時間を無駄にしたくない	22 26.5	24 28.9	28 33.7	7 8.4	2 2.4
(13)保護者からの自分への期待が高いと感じる	6 7.2	14 16.9	32 38.6	18 21.7	13 15.7
(14)休みがたくさんもらえることは大事だと思う	25 30.1	14 16.9	37 44.6	5 6.0	2 2.4
(15)自分ができる仕事は世の中にたくさんあると思う	12 14.5	16 19.3	28 33.7	23 27.7	4 4.8
(16)自分の未来は明るいと思う	10 12.0	13 15.7	35 42.2	14 16.9	11 13.3
(17)お金をかせぐことは大事だと思う	47 56.6	31 37.3	5 6.0	0 0.0	0 0.0
(18)何でも最後は自分で決めたいと思う	35 42.2	25 30.1	15 18.1	8 9.6	0 0.0
(19)今日取り組んだ学習は、自分の将来に役立つと思う	12 14.5	25 30.1	38 45.8	4 4.8	4 4.8

(2)自分の夢をかなえようと意欲に燃えている

自分の夢をかなえることに対する意欲については、「どちらかといえばあてはまらない」というネガティブな回答が最も多く、約3分の1を占めている。質問(2)と質問(6)「自分の未来は明るいと思う」との間には一定の相関関係(相関係数0.56)があり、自分の「未来」をどれだけリアリティをもって想像することができるかということと、それに向かって努力することに意欲を持てることとの間には一定の関係があることが伺える。

(3)自分はこのびのびと生きていると感じる

今自分が生きているありように対して、ポジティブに充実感や満足感を覚えている割合は、比較的高い。「今」という日々には、ある程度満足感を得ているようである。しかし、「今」という時間の延長に必ずしも存在しない「未来」(「今」を変えないと到達できない「未来」の方が多と思われる)に向き合うとき、この充実感や満足感が維持されるかどうかは別の話である。事実、質問(6)「自分の未来は明るいと思う」については、ネガティブな回答(不安な気持ち)の割合が比較的高い。

(4)自分はひとりぼっちだと感じる

「どちらでもない」が最も多く、約3分の1を占めている。他者と友好的人間関係を築くことについては、質問「思いやりをもって他者とかかわることは大事だと思う」で約8割が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答するように、他者と友好的人間関係を築くことの必要性、重要性は認識しているようだが、現実にもそうした関係を築くことができているかといえば必ずしもそうではない現状が伺える。また、この回答は、友人関係だけでなく家族関係の中で捉えるべき可能性もある。後述するように、質問「保護者からの自分への期待が高いと感じる」では、ネガティブな回答の割合が比較的多い。この結果も加味すれば、必ずしも良好な家族関係を築くことができていることを、この回答結果は示唆しているのかもしれない。

(5)みんなと意見が違って、自分の意見を言うことができる

ポジティブな回答とネガティブな回答が、およそ同程度の割合を占めている。ただし、質問「自分なりの個性を大切にしている」の回答結果と比較すると、

そこでは、自らの個性に対してポジティブに評価する回答が比較的多かったのだが、今回の質問において、他者との間で摩擦が起こるほどの個性の表出を意味することから、そうした個性の発揮の在り方については、やや後ろ向きな姿勢が伺える。

(6)無理に人に合わせようとして、きゅうくつな思いをしている

質問(7)で、他者と友好的人間関係を築くことの必要性、重要性を認識している中において、その人間関係にきゅうくつな思いをしているとする回答は、「あてはまらない」または「どちらかといえばあてはまらない」と回答する割合に比べて少ない。しかし、「どちらかといえばあてはまる」との回答も約5分の1存在しており、他者との人間関係の構築に難しさを感じる子どもが一定存在していることが伺える。

(7)思いやりをもって他者とかかわることは大事だと思う

約8割が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、他者と友好的人間関係を築くことの必要性、重要性を認識する割合は非常に高い。しかし、そうした関係を実際に築くことができるかどうか、できているかどうかは、また別の問題である。

(8)自分のやるべきことは責任をもってやり遂げる

約3分の2が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、責任感をもって自律的に行動することの必要性、重要性を認識する割合は高い。ただし、「どちらでもない」や「どちらかといえばあてはまらない」と回答する子どもも一定数存在し、自らの「未来」に対して責任を負うことがいまだできていない子どもの存在が伺える。

(9)過去の失敗をくよくよ後悔しない

約半数が「あてはまらない」または「どちらかといえばあてはまらない」と回答しており、失敗することに臆病になっている子どもが多くいることが伺える。他の質問項目との関係で見れば、(5)「みんなと意見が違って、自分の意見を言うことができる」との間で一定の相関関係があり(相関係数0.40)、また質問(11)「友達とけんかをして、うまく仲直りができると思う」との間でも一定の相関関係がある(相関係数0.40)。そのことから、ここでいう「失敗」は、人間

関係の構築も含め、あらゆるアプローチについて当てはまるものであり、そしてそれらは連続的なもの（勉強の失敗も友人関係の失敗も、それを受容し、乗り越えることができるかどうかは、質的に同じ）であることが伺える。

(10) 難しいことでも、やる気を出せば、できると思う

約半数が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、「やればできる」というメリトクラシーの考えをもつ割合、「がんばる」ことに対して一定の価値を認める割合が比較的高い。また、質問(8)「自分のやるべきことは責任をもってやり遂げる」との間で一定の相関関係がある（相関係数0.45）ことから、「がんばる」という意思と、責任感をもって実行する意思との間には一定の関係があることが伺える。

(11) 友達とけんかをしても、うまく仲直りができると思う

半数弱が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、他者と友好的人間関係を築く中で、「けんか」という日常的で実際的な摩擦が起きた際には、それを乗り越えるだけ積極的な姿勢をもつことができている。しかし、そうした姿勢をもつことができている子どもも一定数存在することも確かである。

(12) 時間を無駄にしたくない

半数以上が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、時間を大切にしたいという姿勢が伺える。ただし、ここで回答者が「時間」をどのように捉えているか、という議論の余地も残る。「未来」の自己実現に向かう企投的な「時間」か、それともただ「今」を充実しながら生きるための「時間」か。「時間」に対する向き合い方は、その後の進路決定に大きく影響を及ぼす可能性がある。

(13) 保護者からの自分への期待が高いと感じる

「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」というポジティブな回答よりも、「あてはまらない」または「どちらかといえばあてはまらない」というネガティブな回答の方が比較的多い。なお最も多い回答は「どちらでもない」である。未来に向けてあるべき「自己」を確立していく中で、最も身近であるはずの保護者から期待を受けていると感じているかどうか

かは、重要な問題であろう。自己の中で家族関係をどのように捉え、それとの関わりの中で、またはそれと切り離して、将来のありたい「自己」を構築していくか、その内面の変化も捉えたいところである。

(14) 休みがたくさんもらえることは大事だと思う

約半数が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、自らにゆとりを持たせ、心をクールダウンさせることの必要性、重要性を感じている割合は比較的多い。

(15) 自分ができる仕事は世の中にたくさんあると思う

約6割が「どちらともいえない」または「どちらかといえばあてはまらない」と回答しており、ポジティブな回答よりもネガティブな回答の割合が比較的多い。この結果は、社会の中にある様々な仕事と、今の自分との間にギャップを感じている表れであろう。それはさらには、自分が社会に出たときの姿をリアリティをもって想像することに困難があるのか、そもそも社会の中にある仕事をリアリティをもって考えることができているか、という問題が潜んでいるだろう。

(16) 自分の未来は明るいと思う

6割強が「どちらともいえない」または「どちらかといえばあてはまらない」と回答しており、ポジティブな回答よりもネガティブな回答の割合が比較的多い。質問と同様、「今」の自分から「未来」のありたい自分を投影するとき、その間にギャップが存在するのは誰しも必然のことである。重要なことは、そのギャップを努力の糧として前に進むことができるかどうかである。そこで、自分の未来に対して少なからずポジティブな姿勢をとることができるかどうかは、その可否を分ける要因の一つであろう。

(17) お金をかせぐことは大事だと思う

94%が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、また「あてはまらない」または「どちらかといえばあてはまらない」というネガティブな回答がないことから、お金をかせぐことの必要性、重要性についてはほぼ全員がそう感じている。ただし重要なことは、質問(15)「自分ができる仕事は世の中にたくさんあると思う」で見たように、お金をかせぐための仕事について、リアリティをもって想像することができるかどうかである。

(18)何でも最後は自分で決めたいと思う

7割以上が「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、「決める」ということについて受け身である回答はほとんどない。何事においても、自分で決めることに重要性を感じているようである。問題は、その決めた結果（良い結果、悪い結果）を全て引き受ける覚悟があるかどうかである。

(19)今日取り組んだ学習は、自分の将来に役立つと思う

「あてはまる」または「どちらかといえばあてはまる」と回答しており、今回取り組んでもらった学習にその効果が一定認められよう。ただし、同じく約半数が「どちらでもない」と回答しており、その割合が最も多い。ネガティブな回答も少ないながら存在することから、今後も改善の必要性に開かれていることが認められる。

2.2. JST を受けたことによる変化

本稿の目的は、通信制課程卒業生の進路未決定の問題を前に、通信制課程の高校生を対象に、JST というキャリア教育プログラムを行った結果として、社会参加意識をはじめとする彼らの内面における心的傾向の変化を捉え、それらプログラムの効果を測定することにある。前項では、JST を受ける前の彼らの内面の特徴を把握するため、初回のガイダンス後に実施したアンケート調査の回答結果を考察した。本項では、JST を受けた後の彼らの内面における心的傾向の変化を分析的に捉えたいと思う。

① 因子分析：5つの因子の特徴と命名

そこでまず、質問(1)から(19)について、因子分析を行う（最尤法、バリマックス回転）。分析ソフトはJMP 11を用いた。

分析の結果、各因子の固有値は図1のようになり、累積寄与率から5つの因子を取り出した。なお、「共通因子が1つもない」を帰無仮説とする有意性検定を行った結果、表5に示すとおり1%水準で棄却され、共通因子の存在が示唆された。また、「5因子で十分である」を帰無仮説とする有意性検定を行った結果、表5に示すとおり1%水準で棄却され、5因子で十分ではないこと、5因子ですべてを説明することができるとは限らないことが示された。その限界を受け止めた上で、今回は5因子で分析を進めたいと思う。

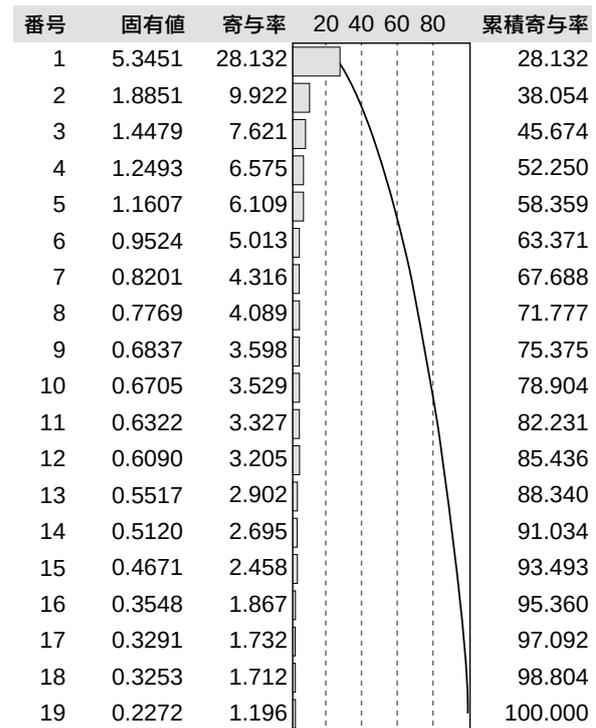


図1 固有値（因子分析）

表5 有意性検定

検定	自由度	カイ2乗	p値 (Prob>ChiSq)
H0: 共通因子が1つもない。	171.000	1071.867	<.0001*
HA: 少なくとも1つの共通因子がある。			
検定	自由度	カイ2乗	p値 (Prob>ChiSq)
H0: 5因子で十分である。	86.000	132.269	0.0010*
HA: もっと多くの因子が必要である。			

因子1は、質問「自分のやるべきことは責任をもってやり遂げる」(0.57)、質問(15)「自分ができる仕事は世の中にたくさんあると思う」(0.52)、質問(10)「難しいことでも、やる気を出せば、できると思う」(0.46)、質問(11)「友達とけんかをして、うまく仲直りができると思う」(0.46)、質問(5)「みんなと意見が違って、自分の意見を言うことができる」(0.45)、質問(2)「自分の夢をかなえようと意欲に燃えている」(0.41)、質問(1)「自分なりの個性を大切にしている」(0.40)、質問(12)「時間を無駄にしたくない」(0.38)の因子負荷量の結果から「自己実現志向」と命名した。たとえ問題が生じたとしても、自分なりにそれを受け止め、前進していこうとする意思を表している。

因子2は、質問(15)「自分ができる仕事は世の中にたくさんあると思う」(-0.32)、質問(11)「友達とけんかをして、うまく仲直りができると思う」(-0.34)、質問(5)「みんなと意見が違って、自分の意見を言うことができる」(-0.59)、質問(1)「自分なりの個性

を大切にしている」(-0.32)、質問(9)「過去の失敗をくよくよ後悔しない」(-0.43)、(6)質問「無理に人に合わせようとして、きゅうくつな思いをしている」(0.77)、質問(4)「自分はひとりぼっちだと感じる」(0.49)、(16)質問「自分の未来は明るいと思う」(-0.35)、(3)質問「自分はこのびのびと生きていていると感じる」(-0.32)の因子負荷量の結果から「社会的消極志向」と命名したい。他者との関わりの中で、また将来の在りたい自己との関係の中で、積極性を出しづらいため後ろ向きの心的傾向を表している。

因子3は、質問(8)「自分のやるべきことは責任をもってやり遂げる」(0.32)、質問(7)「思いやりをもって他者とかわることは大事だと思う」(0.71)、質問(19)「今日取り組んだ学習は、自分の将来に役立つと思う」(0.51)、質問(17)「お金をかせぐことは大事だと思う」

う」(0.50)、質問(14)「休みがたくさんもらえることは大事だと思う」(0.48)の因子負荷量の結果から「現実性志向」と命名したい。それが有益かどうか、必要かどうか、大事かどうか、それを実行すべきかどうかを、現実的に思考することができるリアリストの姿勢を表している(「自己実現志向」の人よりも冷静な視点を持っているかもしれない)。

因子4は、質問(15)「自分ができる仕事は世の中にたくさんあると思う」(0.33)、質問(2)「自分の夢をかなえようと意欲に燃えている」(0.36)、質問(16)「自分の未来は明るいと思う」(0.88)、質問(13)「保護者からの自分への期待が高いと感じる」(0.48)の因子負荷量の結果から「将来希望志向」と命名したい。

最後に因子5は、質問(18)「何でも最後は自分で決めたいと思う」(0.92)の因子負荷量の結果から「自己決定志向」と命名したい。

表6 回転後の因子負荷量

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5
(8)自分のやるべきことは責任をもってやり遂げる	0.57	0.02	0.32	0.16	0.12
(15)自分ができる仕事は世の中にたくさんあると思う	0.52	-0.32	0.01	0.33	0.07
(10)難しいことでも、やる気を出せば、できると思う	0.46	-0.16	0.23	0.20	0.10
(11)友達とけんかをして、うまく仲直りができると思う	0.46	-0.34	0.14	0.09	0.05
(5)皆と意見が違っても、自分の意見を言うことができる	0.45	-0.59	-0.14	0.04	0.10
(2)自分の夢をかなえようと意欲に燃えている	0.41	-0.25	0.11	0.36	0.29
(1)自分なりの個性を大切にしている	0.40	-0.32	0.14	0.25	0.19
(12)時間を無駄にしたくない	0.38	0.02	0.26	0.02	0.06
(9)過去の失敗をくよくよ後悔しない	0.28	-0.43	-0.09	0.17	0.09
(6)無理に人に合わせようとして、窮屈な思いをしている	0.05	0.77	-0.07	0.09	-0.09
(4)自分はひとりぼっちだと感じる	-0.09	0.49	-0.19	-0.16	0.02
(7)思いやりをもって他者と関わることは大事だと思う	0.26	-0.18	0.71	0.06	-0.12
(19)今日取り組んだ学習は、自分の将来に役立つと思う	0.05	0.01	0.51	0.09	0.01
(17)お金をかせぐことは大事だと思う	0.28	-0.19	0.50	-0.04	0.19
(14)休みがたくさんもらえることは大事だと思う	0.05	0.02	0.48	0.07	0.26
(16)自分の未来は明るいと思う	0.18	-0.35	0.16	0.88	0.22
(13)保護者からの自分への期待が高いと感じる	0.13	0.06	0.03	0.48	-0.14
(3)自分はこのびのびと生きていていると感じる	0.18	-0.32	0.25	0.26	0.04
(18)何でも最後は自分で決めたいと思う	0.30	-0.15	0.18	-0.05	0.92

②主成分分析：プロット図における心的傾向の変化問題は、これらの心的傾向が全体としてどのような意味を持つかということである。つまり、それぞれの心的傾向が固有にもつベクトルの向きと、それらの間の相関性と相違性を把握した上で、生徒一人ひとりの心的傾向の変化を可視的に捉えたい、ということである。JSTを受けたことで、彼らの内面においてどのような心的傾向の変化を見せたのかを捉えたい。

そこで次に、各回答結果(83名が2回または4回にわたって回答した結果188件)に対して出力された因子得点を主成分分析にかけ、出力された主成分得点のプロット図から、因子間の関係を捉える。

分析の結果、5つの主成分が出力された。表7と表8は、その結果を表している。分析の結果、5つの主成分が出力されたが、今回は主成分1と主成分2から成るプロット上で、5つの因子「自己実現志向」「社会的消極志向」「現実性志向」「将来希望志向」「自己決定志向」の特徴を捉え、その上で生徒一人ひとりの心的傾向の変化を可視化したいと思う。

表7 固有値(主成分分析)

番号	固有値	寄与率	累積寄与率
1	1.2181	24.362	24.362
2	1.0633	21.265	45.627
3	0.9766	19.533	65.160
4	0.9292	18.584	83.744
5	0.8128	16.256	100.000

表8 固有ベクトル (主成分分析)

	主成分 1	主成分 2	主成分 3	主成分 4	主成分 5
因子 1	0.63671	0.19656	-0.01845	-0.33629	0.66523
因子 2	-0.46075	0.47544	0.41698	0.37142	0.49985
因子 3	0.46355	0.19594	0.73980	0.08396	-0.43861
因子 4	0.21664	-0.70420	0.16255	0.58360	0.30026
因子 5	0.34713	0.44837	-0.50206	0.63350	-0.15840

表8の固有ベクトルと図2の要約プロットから、主成分1では、因子1「自己実現志向」と因子3「現実性志向」と因子5「自己決定志向」が特に強くプラスの向きで近接するベクトルの関係にあり、他方、因子2「社会的消極志向」が独り強くマイナスの向きで存在する。主成分1は、それらを一貫して説明する軸として設定される。

主成分2では、因子2「社会的消極志向」と因子5「自己決定志向」が特に強くプラスの向きにあり、因子1と因子3もプラスの向きを持っている。他方、因子4「将来希望志向」が独り強くマイナスの向きにある。主成分2は、それらを一貫して説明する軸として設定される。

これらの主成分(軸)の命名はさておき、重要なことは、図2のプロット図における各象限の特徴である。第一象限は、因子1「自己実現志向」と因子3「現実性志向」と因子5「自己決定志向」が近接する関係にあり、進路決定や社会参加意識の向上を図ろうとする上ではポジティブに評価できる領域と解釈できる。

他方で、第二象限は、因子2「社会的消極志向」の

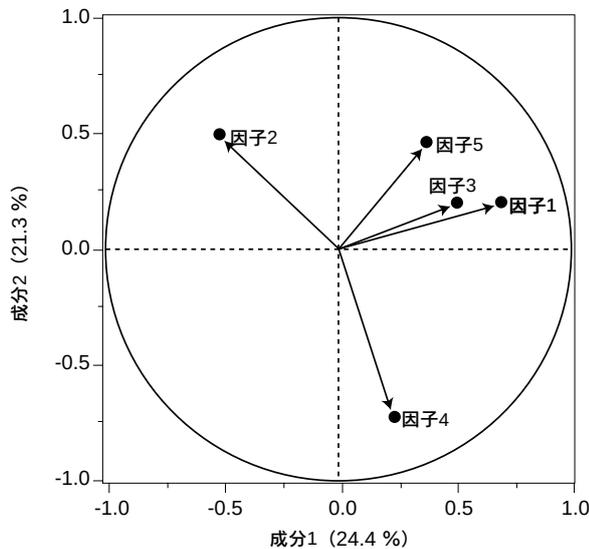


図2 要約プロット (因子のプロット)

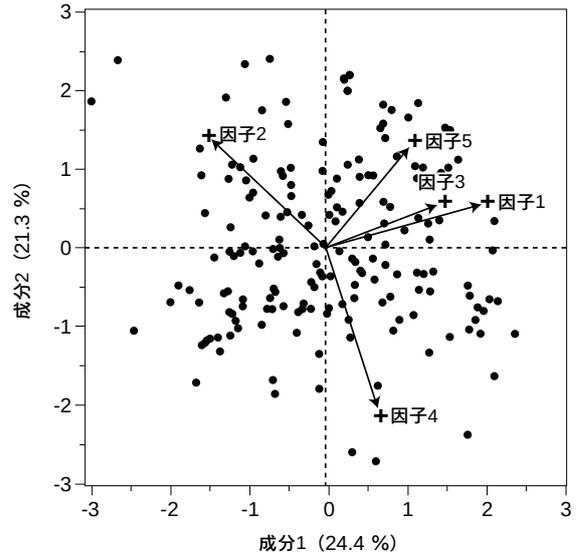


図3 バイプロット

みがここに位置し、進路決定や社会参加意識の向上の観点からはネガティブに評価できる領域と解釈できよう。そして、第四象限は、因子4「将来希望志向」のみがここに位置し、因子4は質問(16)「自分の未来は明るいと思う」が0.88という因子負荷量を持つことから、未来に対するポジティブな投影意識がここに表れている。つまり第四象限についても、現実を直視しない傾向がやや表れているのかもしれないが、それでも進路決定や社会意識の向上を図ろうとする上ではポジティブに評価できる領域と解釈できる。

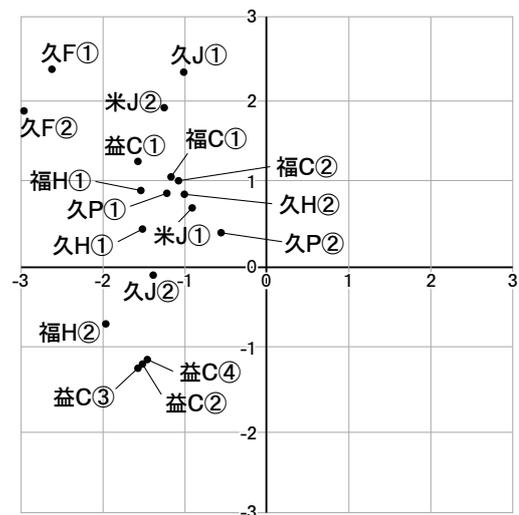


図4 プロット上における心的傾向の変化

以上から、通信制課程卒業生の進路未決定の問題を前に、彼らの社会参加意識をはじめとする心的傾向を捉える上でまず注目すべきは、第二象限に位置する生徒たちであることがわかる。将来の進路決定に向け

て、社会参加意識等を継続的に醸成していかなければならない中において、特に「社会的消極志向」が強い状態にあるのが、この第二象限なのである。したがって、将来の進路決定に向けて彼らがまず為すべきは、第二象限から脱出することである。そこで、JSTを受けた結果、彼らが果たしてこの第二象限から脱出することができたかどうかを把握するため、プロット図の上に、各生徒のデータをプロットした。それが図4である。

個票データでは、本校とサポート校の久留米 SHIP、松江 SHIP、福山 SHIP、鳥取 SHIP の5か所それぞれにおいて、事業対象者（高校生）をA, …とナンバリングした。久留米は30名のため、A, …Z, AA, …ADまで付している。その上で、第二象限にプロットされた生徒をピックアップすれば、久留米 SHIP のF、米子 SHIP のJ、益田本校のC、福山 SHIP のCなどである。

図4では、さらに彼らの変化を捉えるため、実施場所、調査回数、アルファベットを合わせたナンバリング（久留米のFが1回目のアンケート調査で回答した結果は久F①と表記）を付して、そのデータをプロットしている。これを見ると、久留米 SHIP のFは、1回目も2回目も第二象限にあり、また福山 SHIP のC、久留米 SHIP のH、Pもまた、2回目とも第二象限にあることがわかる。つまり、第二象限から脱出することは困難なのである。

しかし一方で、久留米 SHIP のJや、益田本校のC、福山 SHIP のHは、第一象限や第三象限にまで飛躍することは叶っていないものの、JSTを受けた2回目以降において、第二象限から脱出することは果たされている。

このように、JSTを実施する過程で、進路決定に関連して彼らの社会参加意識をはじめとする心的傾向がどのように変遷を辿ってきたかを、そのすべてではないにしても、可視化して捉えることができる。

ただし、この心的傾向の変化が、果たしてJSTを受けた結果のものであるかどうか、つまりJSTを受けたこととこの変化の間に因果関係が存在するかどうかは、いまだ定かではなく、その点においては分析上限界があることは確かである。

また、JSTを受けた後に、第二象限から脱出できた者とそう出ない者との差はどこにあったのかについても、いまだ不明である。さらなる分析が必要となる。

おわりに

本研究では、学校法人益田永島学園・明誠高等学校による文部科学省委託事業のもと、通信制課程卒業生の進路未決定の問題を前に、通信制課程の高校生を対象に、JSTというキャリア教育プログラムを行った結果として、社会参加意識をはじめとする彼らの内面における心的傾向の変化を捉え、それらプログラムの効果の測定を目的にアンケート調査を行い、その結果の分析を行った。アンケート調査では、進路決定に課題をもつ通信制課程の固有性を踏まえた上で、JSTを受けた高校生たちの内面の変化を捉えることを重視した。つまり、JSTを繰り返す中で、彼らの内面における社会参加意識等の心的傾向にどのような変化が行っているか、またどのような課題を有する生徒がまだ存在するかを可視化することを第一の目的とした。

分析の結果、「社会的消極志向」という因子が出力され、さらに因子間のベクトルの相関性と相違性を踏まえ、その全体を捉えた上で、二次元のプロット図の上で、課題となる象限の存在を発見するに至った。そして、その象限からの脱出を第一の課題と位置づけ、彼らの内面における心的傾向の変化を、プロット図の上で可視化することに成功した。

ただし、本稿の冒頭にも述べたように、事業対象者が調査時点で高校1・2年生であったことから、通信制課程卒業生の進路決定率の改善を目的に、それを規定する要因を探り、その改善に効果的なキャリア教育の指導方法を探る上で必要となる視座を得る、という重要な課題については未着手の状態である。今後は、事業として二つ目の課題についても扱っていきたい。

註及び文献

- 1) 文部科学省「学校基本調査」の「卒業後の状況調査」から算出した。
- 2) 学校法人益田永島学園・明誠高等学校通信制課程の詳細について、学校法人益田永島学園・明誠高等学校HP (<http://meisei-ship.com/access.html>) を参照されたい。
- 3) 本事業で実施したキャリア教育の内容については、文部科学省HP (http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kaikaku/sesaku/1418873.htm) を参照されたい。

苺谷剛彦・粒来香・長須正明・稲田雅也(1997)「進路未決定の構造—高卒進路未決定者の析出メカニズムに関する実証的研究—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第37巻、45—76頁。

- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
(2002)『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進
について (調査研究報告書)』
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
(2013)『キャリア教育・進路指導に関する総合的実態
調査 第一次報告書』
- 国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター
(2011)『キャリア発達にかかわる諸能力の育成に関す
る調査研究報告書』
- 酒井恵子・久野雅樹 (1997)「価値志向的精神作用尺度の
作成」『教育心理学研究』第45巻第4号、388-395頁。
- 鹿内啓子 (2004)「女子高校生の進路選択に関わる要因」
『北星学園大学文学部北星論集』第41巻、13-27頁。
- 鹿内啓子 (2016)「高校生における進学意識と進路決定自
己効力感および職業未決定との関連」『北星学園大学
文学部北星論集』第53巻第2号、35-46頁。
- 下山晴彦 (1986)「大学生の職業未決定の研究」『教育心理
学研究』第34巻第1号、20-30頁。
- 文部科学省 (2006)『高等学校におけるキャリア教育の推
進に関する調査研究協力者会議報告書 ~普通科にお
けるキャリア教育の推進~』

(2019. 8. 8 受理)